まなざし

香取　淳

旧盆の休みで帰省していた私に「卒業十周年の同級会を、富貴子の店でやるから」と声を掛けてくれたのはKでした。それは八月十四日の、夜八時か九時のことだったと思います。私が、漁港の近くにある富貴子の美容院を訪ねると、ガラス張りの小さな店は明かりが消されて、その奥に建つ古びた家から賑やかな声が漏れていました。平屋建ての玄関は戸が空き放たれていて、三和土に靴やサンダルが散らかっていました。その先にある十二畳ほどの居間では、すでに十人余りの男女が酒盛りを始めていました。車座の突き当りにいた彼女は、小さく頷いて私を歓迎してくれました。私も彼女に会釈を返したものの、ひどく場違いな感じにとらわれて、その場に立っていました。

「久しぶりだな、浩司。早く座れよ」

そばにいたKが、私に声を掛けて、入り口近くに場所を開けてくれました。私はその言葉に促されて円座に加わり、かつての同級生たちを見まわしました。男のほうが女より少し多かったでしょうか。それぞれが立派な青年になっていましたが、子供の頃の面影も色濃く残っています。それらの懐かしい顔ぶれの中で、彼女はバラの花のように輝いて見えました。かたちのよい顔の輪郭や目鼻立ちは幼い頃と変わりませんが、洗練された髪形や化粧のためか、眩しいほどに美しかったのです。しかし、開業したばかりで苦労が多いのでしょうか、その顔には憂いと気だるさが漂っていました。

私は、中学を出ると千葉市内に下宿をして高校に通いました。大学は北海道を選び、卒業後は精密機械の会社に就職して、そのときは札幌勤務でした。郷里から遠く離れていたの

で、めったに帰省することもなく、中学の同級生たちに会うのは久しぶりのことです。最初は緊張していた私ですが、酒の酔いも手伝って、次第に打ち解けていきました。集まった級友たちと話していくうちに、彼らはみな地元か首都圏に住んでいて、遠方から参加したのは私ひとりだということが分かりました。

午前零時ごろに二、三名が遠慮がちに立ち上がり、言葉少なに引き上げていきました。少しして、また何人かが去っていきます。残った者たちは彼らには構わずに、とりとめもない話に夢中でした。

夜中の一時を過ぎた頃のことでしょうか。誰が言いだしたかは定かでありませんが「ドライブに行こう」ということになり、「行こう、行きたいわ」という声がそれに重なりました。みな飲み食いには飽きてしまったのでしょう。車はKのセダンと、私が兄から借りてきたライトバンがありました。彼らは、部屋を飛び出して駐車場に停めた二台の車に分かれて乗り込みました。富貴子は、みなが出た後で戸締りをして、私の車のリアシートに座りました。Kの車が先導して、二台は海辺の道を銚子の方に向かいました。直線で平坦な道の片側に、ときおり民家の明かりや街灯が見え隠れするほかは真っ暗な闇でした。しかし、車の中は賑やかで、話し声が絶えることはありません。少し鼻にかかった彼女の声を背後に聞きながら、私は心地よくハンドルを握っていました。

道は海辺から離れて、長い坂を上がって行きました。突き当たりの信号を右折して、起伏の多い道をしばらく行くと、犬吠埼の灯台が等間隔のリズムで点滅しています。私たちは〈地球が丸く見える丘〉に車を停めて、外に出ました。海から吹き上げてくる潮風が酔い覚めの顔をなぶります。銚子の街並みを示す淡い街灯、回転する灯台の明かり、その先の暗い海に浮かぶ小さな明かりは漁火でしょうか。しばらく高台を散策していた私たちは車に戻りました。そして、Kの運転する車が先になって、来た道を引き返します。長い坂を下り、

海辺の平坦な道に差し掛かる頃に、東の空が白みはじめました。

九十九里町の入口近くの広がりでKが車を停めました。私もその車の後にライトバンを停めます。ドアを開けて外に出た私たちは、そこで別れの挨拶を交わして、再び車のシートに戻りました。そして、二台の車は別々になって、それぞれの家に向かいます。私の車のリアシートには、富貴子ともう一人の女性が乗っていました。内陸側にある高い生け垣で囲まれた家の前でその女性を下ろし、私は富貴子の家に向かいます。漁港に近い交差点の右脇に美容室が見えてきました。私は、「ありがとう、とても楽しかった」と言いながら、黄色が点滅する信号の前で車を停めました。「私も、とっても」と小さな声を残して、彼女が車を降りました。私は、左手を軽く振りながらアクセルを踏み込もうとしました。しかし、背中に何かを感じて振り返ると、彼女は道端にそのまま立っていました。切れ長の目を大きく見開いて、私をじっと見詰める眼が、潤いを帯びて燃えるように光っていたのです。

私は、盆休みが終わって札幌の街に戻ってきました。しかし、営業の仕事に出かけても話す言葉に力が入りません。取引先の客と面談が済み、車に戻ると富貴子の顔が浮かんできました。営業車のドアを閉めてハンドルを握ると、背中にあの眼差しが突き刺さってくるのです。私は、衝き動かされるように手紙を書きました。「先日の明け方に、私を見送ってくださったあなたの熱い眼差しを忘れることができません。もしよかったら、札幌に出てきませんか。札幌で私といっしょに暮らしましょう」と。彼女は三人兄弟の末っ子ですし、私も五人兄弟の四番目ですから、互いに家のことは心配しなくてもよいと思ったのです。

数日後、彼女から返事が届きました。私は、心を躍らせて白い封書を開けて、折りたたまれた便箋を広げました。

「私はいま、兄夫婦が残していった幼い二人の子供たちを育

てています。兄は事業が思わしくなくて、昨年の秋に夫婦で姿を消してしまったのです。私は仕事のかたわら、二人の子育てと、高利貸しの執拗な取立てに悩まされています。もし、私を救ってくれる奇特な人がいるなら縋りたいとも思いますが、そのような人がいるわけはありませんし、そのようなことを望んではいけないのです。

先日いただいたあなたからのお手紙、涙が出るほど嬉しく読ませていただきました。でも、私は幼い二人の子供を見捨てるわけにはいきません。いつの日か、兄夫婦が戻ってきたときには住める家も残しておいてあげたいと思います。とても辛いことですが、それが私に与えられた運命だと思っています。ですから、浩司さん、もう二度と私に　お手紙は書かないでください」

私はしばらくその手紙を見詰めていました。できることなら、すぐに札幌を発って、九十九里浜の彼女のもとに駆けつけたい衝動に駆られました。しかし、私にはそうすることができませんでした。もともと人づきあいが苦手な私ですから、営業の仕事が務まるかどうか、全く自信がなかったのです。毎日が失敗の連続で、取引先や上司の信頼をはやく得なければいけない、と焦っていたときでした。ですから、幼い子たちの養育や兄の負債まで抱え込みそうな彼女と、共に生きていく力もなければ、その勇気さえ湧かなかったのです。

それから三年経ったある秋の日に、Kから一通の手紙が届きました。そこには、彼女が九十九里浜の漁港に、車ごと飛び込んでしまったこと、そして暗い海から引き上げられたレンタカーには、幼い二人の子たちと流れ者風情の男がいっしょに冷たくなっていたこと、が綴られていました。

了